

日本気象学会1992年秋季大会（札幌）報告

1992年の日本気象学会秋季大会は、10月7日から9日まで、札幌市教育文化会館、及び、北海道厚生年金会館で行われた。実施状況は次の通りである。

研究発表会 284題（内ポスターセッション11題）

参加者 362名

シンポジウム 「都市の豪雪」 —ここまできた降雪の観測と予測—

参加者 200名

講師 村松 照 男 （札幌管区気象台）

上 田 博 （北海道大学理学部）

藤 吉 康 志 （名古屋大学水圏研究所）

浅 井 富 男 （東京大学海洋研究所）

二 宮 洸 三 （気象庁予報部）

懇 親 会 1992. 10. 7 北海道厚生年金会館

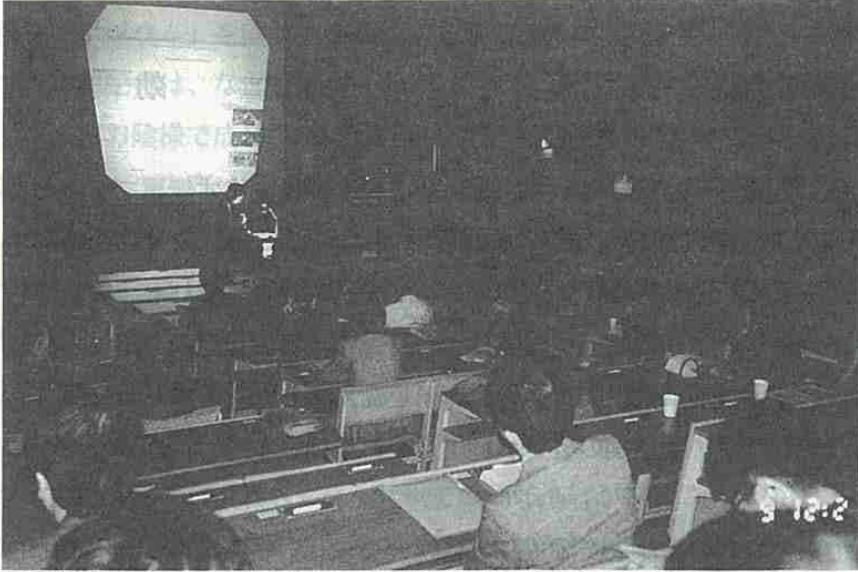
参加者 212名

4会場制になって2回目の大会であり、研究会も活発に行われ、内容豊かな大会であった。また、北海道支部の今 勝義会員と川野 浩会員に奨励賞が授与された。大会の成功は支部会員の協力の賜であった。ここに、次回の北海道地区での大会の成功のためにも、今回の大会をふり返って気付いたことについて会員の寄稿を掲載することにした。

尚、シンポジウムの内容については、「天気」40巻6号373～402ページに報告されています。



◀総 会 風 景



日本気象学会1992年秋季大会

◀研究発表風景



◀ポスターセッション



◀懇親会風景

1992年日本気象学会秋季札幌大会

久保田 効

標記大会は、成功裡に挙行されました。大変喜ばしいことです。成功裡というのは、まず無事であったこと、4会場使用できて過去最高に近い研究発表数(284件、最高は289件)となったこと、決算に余裕が生じたこと、130名参加の懇親会に菊地教授提案の北海道の味覚を提供できたこと等です。これも、大会の約1年前に発足した大会準備委員会および気象学会本部の講演企画委員会の委員によるお世話のお陰だと感謝しています。大会準備委員会は、大会の約3カ月前に大会実行委員会と名を変えました。その時点で気象台職員の転勤による委員の入れ替えがありましたが、他機関の委員が、よくそれを補強してくださったことに感謝します。

シンポジウム“都市の豪雪—ここまで来た降雪の観測と予測—”は札幌大会らしい特色をもったものでした。主題はいかにも工学的に聞こえますが、実際の内容は副題のように、理学的なものでした。

雪のメソ量的予報は、交通手段の確保や除雪作業の準備のため、北海道にとって需要の高い予報です。札幌総合情報センターでは既に札幌市周辺の降雪予報をきめ細かく行っており、札幌管区気象台も平成4年12月から、各支庁を3分割した程度のこれまでより細かい地域を対象にして最大降雪予報を開始しました。シンポジウムや大会のメソ現象部門や雪部門、海洋・雪氷・大気相互作用部門で発表された研究は将来これらの業務的予報の精度向上を図る上で、陰に陽に役立つと思います。

このようなどちらかといえば高周波の気象現象とは対症的な低周波の気候変動や地球環境問題も北海道地方にとって重要なテーマです。道庁が行った世論調査では道民が多くの社会問題のうち、オゾン・温暖化・酸性雨などの地球環境問題に最大の関心を寄せていることが分かりました。

北海道における高周波の気象現象にしろ低周波の気候現象にしろ、ユーラシア大陸や日本海、オホーツク海からの影響が重要です。これらの把握には、ロシアとの共同研究やデータ交換が貢献します。幸い北大では「永久凍土日ロ共同研究」を発足させていて、今回も北大低温研に滞在中のロシア人研究者による融氷実験の発表がありました。ロシアの水理気象局とも自由な学会活動を通じて交流が出来ればロシアの観測データの事情など明白になるのではないかと期待されます。

札幌大会へのご協力有難うございました

澤田 可洋

気象学会全国大会が札幌で開かれる、おまえはシンポジウム担当である、と聞かされて昨年4月に赴任してきました。気象学会北海道支部理事をおおせつかったうえ、大会実行委員会の中では懇親会、報道対応な役もいただきました。役職上とは言え、これまで地震、火山分野の仕事が長かった私には、これは大変という思いと、エイ何とかなるだろうとの決心(?)が同時進行でした。

案ずるよりは... の例えではありませんが、私とともにシンポジウム担当をされた播磨屋先生、遠藤先生、村松予報課長は当方の実状を十分ご承知でした。札幌大会にふさわしいテーマとして選定された「都市の豪

雪シンポジウム」を盛り上げるにはどうしようか、何を狙おうか、講師にはだれを、講演内容はこんな趣旨で、時間配分は、などなどが打合せの中で具体化して行きます。講師各位にもご理解をいただき、当シンポジウムはお陰様で成功裡に終わりました。私自身も豪雪について改めて勉強させていただきました。このシンポジウムの内容は播磨屋先生のご努力で天気に掲載される運びとなっています。

シンポジウムの後に設定された懇親会も大盛況で、菊地先生のアイデアによる札幌大会らしい食品も大受けでした。また、最近では異常気象、気候変動、地球環境への関心が強まっていますが、札幌大会でもこの話題を中心にマスコミの取材が活発でした。実質の報道対応担当を村松予報課長に押しつけてしまいました。発表の特色、その内容、トピックスなどの解説を丁寧に行っていただき、この面でも好評でした。

なお、参加者を会場から呼出す方法にはもう少し工夫がいると思います。また、学会が発展するとともに、複数会場、別フロア、さらに別建物での同時進行が続くこととなりますが、他の会場の進行状況を容易に把握できるような何か良いアイデアはないのでしょうか。それから、自分のことで恐縮ですが、火山現象のリモートセンシングに興味を持つ私にとって、気象学会との係りは大変に有益です。同好の士はまだ限られています。今後ともよろしくお願いいたします。

私は昨年4月からの担当でしたが、大学、気象台の学会担当の方々には会場探し、資金のやりくりなどで大変なご苦労だったと思います。開催前、中、後の幹事の皆様の献身的な活躍には頭が下がります。準備をただけで、あえなく(?) 転勤となった方々も含め、お疲れ様でした。

シンポジウムを担当して

播磨屋 敏 生

今回の秋季大会では、シンポジウム担当として準備委員会の段階から運営に加わり、最終的には、実行委員としてD会場の責任者、大会前日のメソ気象研究会の講演者、シンポジウム座長、スペシャルセッション「雪」の呼びかけ人代表として忙しい4日間であった。メソ気象研究会報告は「天気」4月号に印刷され、スペシャルセッション「雪」の報告は「天気」6月号に印刷予定なので、ここでは座長をつとめたシンポジウムについての感想を述べることにとどめる。

5年前の札幌での大会でもシンポジウムのテーマとしてやはり豪雪をとりあげた。しかし、その後、複数のドップラーレーダー、航空機を使った科学技術庁関係のプロジェクトが東北地方で数年にわたり、また文部省関係のプロジェクトが北海道で平成4年冬に行われた。他方、数値予報及び数値実験では、気象庁でのJSMモデルによる数値予報、またその他の人による微細格子のモデルによる研究と進歩がみられた。また札幌では、札幌総合情報センターが独自のレーダーと札幌市内50カ所に設置したマルチセンサーなどの情報をもとにした予報を営業運用することになっている事等をふまえて、豪雪をとりあげて“ここまで来た降雪の観測と予測”と副題をつけたテーマにした。各講師の方々には、実態と予報、観測(I、II)、数値実験、中小規模擾乱のまとめの話題を提供してもらった。

今回特に注意したことは、過去のシンポジウムでは各講演者に対する質疑応答のみで、シンポジウムの特徴である総合討論が十分に行われない例が多いので、そうならないようにしようということであった。シン